

毎日歌壇

加藤 治郎 選

祝日のぬるい時間に腰掛けて△蜜△という名のマニキュアを塗る 所沢市 神田 望
△評△満ち足りたアンニユイな雰囲気を感じられる。祝日に△蜜△がからわしい。腰掛けてというスケッチが生まれている。

でかいはん屋みたいなコインランドリーなかを直視したくない夜に 横浜市 永永 キヌ
△評△ユーモラスである。なるほど大きな判子が並ぶ。下句はいくぶん苦しい心情だ。愛想ない店員さんの髪色が栗色になる秋はそこまで 東京 新井 将

アンモナイトみたいに眠る秋が来たわたしはいつも怖がりだった 横須賀市 森久保りか
きみの名の花のラベルのシャンプーはきつと儂い香りだろな 埼玉 玖嶋さくら

街と呼ぶには不確かなこの星でヒトは駆け足する通り雨 大津市 世田 夏雪
苗を植えた ひかりのなかでお互いの瞬きの音だけがきこえた 平塚市 芝澤 樹

月きれい思わず君にメールする理由ができた よつな気がして 岡山市 早崎 麗

瞳孔の赤いこどもが足もとへ来てへちまつけを待っている午後 花巻市 永汐 れい
雨の後水嵩ました多摩川で魚捕らえた白鷺をみた 西東京市 佐々木節子

水原 紫苑 選

「死んだ神」あえて破れて道にあるピニール傘に名を付けるなら 枚方市 久保 哲也
△評△「神は死んだ」事実を裏側から発見する詩の角度にひかれる。破れた傘ほど孤独なものがあるだろうか。

河はみな海へ注ぐと思つ日の注いだあとの河はわたした 浜松市 尾内甲太郎
△評△海へ水を注いだあとの河の空虚を語る言葉、新しい詩である。

夕べにノウゼンカズラはいえむしろ、ぼくらの顔に花の量感 岩沼市 アンコウなま
まひるまの星のひかりに手をのぼすまだ声になる前の叫びへ 宮古島市 塩見 伴

whereのなかにhereは含まれてどこへ行けども身体にわたし 東京 石川 真琴
飛行機を発明したのがわたしなら絶対だれにもおしえなかった 横浜市 瀬生ゆう子

神様のオーディションみた神栖産ビーマンひつじ選ぶゆびさき 千葉市 深海 泰史
二目目のポトフみたいな世界のほうがほんとう。たまに眼鏡を外す 金沢市 塩本 抄

西へ西へ旅人はゆく 太陽にその身を長く晒せるように 東京 小亀 令子
内臓のふくらみきった地下鉄にいる神さまの顔が知りたい 花巻市 永汐 れい

伊藤 一彦 選

図書館の金子みすゞの棚にある貸出し中の隙間が嬉しい ふじみ野市 雨雨雨汰
△評△自分が愛読し、他の人にも読んで欲しい本がある。作者にとっては金子みすゞだ。棚の「隙間が嬉しい」の率直さがいい。

戦場に亡くなりし人の着信音 かけた人の最後の願い 西宮市 神代 もと
△評△最期に誰に何を言いたかったのだろうか。自分だったらと想像する作者である。

棋士たちの指は碁盤のざわめきや碁石の息を感じる器言 名張市 さるすべり
ねえ待つね、随分待つね 秋なのにだからこそ遠すぎる紅葉 横浜市 永永 キヌ

みすからの重みに耐えて時を待つつつくしき妻を風は揺らせり 京都市 小池ひろみ
鍵という鍵がはずれるように寝てわたしをまく組み立てられない 東京 石川 真琴

今日もまた何も無い日でありましただけれもない海に来て告ぐ 垂水市 岩元 秀人
街中に熊が出たよと吠けば庭の秋草 鎮く仕草も 由利本社市 佐々木静江

デジタルのスマホで悪い伝えてもうぶな初老の恋はアナログ 下関市 藤川 政美
新米のおむすび一つ艶めいてぐるり眺めて土産として 酒田市 朝岡 剛

米川千嘉子 選

乳房の間にそつとお骨抱くまゝであなは小鳥のやうね 大阪市 森川 慶子
△評△亡き人の骨を抱き寄せる。「乳房の間」という生々しさと小さく軽くなった人を「小鳥」にたとえる切なさ響き合う。

このほか遠くの町へ来たようだ「赤毛のアン」で泣かなくなった 東京 夏目 そよ
△評△いつの間にか自分が変わっていたのだ。その違和感をひょうひょうと表した。

新しき入れ歯装着せし母はじオラコスモス黄菊購つ 名古屋市 甲斐万里子
己が若き試さるるまま受験生鉛まみれに芯握るなり 東京 真鍋 真悟

「バス代が無いから歩いて来ました」と八キロの道あの人来た 藤沢市 原島 吉光
陰日向るぐるぐる廻る螺旋階段人生ならば駆け落ちさう 神奈川 中島やさか

育てたる音が親なる鳥なり仲間を追われ逃げ帰る来る 福知山市 阪梨 義春
淡々と皿を洗えば真つ白な満月が手に輝く夕べ 札幌市 住吉和歌子

「ポイントほつ」 「割引券ほつ」一杯のコーヒー頼むまでの関門 南魚沼市 木村 圭
一人身の何となく哀しくて淋しくてそのうちにわれ歌うたい出す 千葉市 新城 瑠璃

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。